

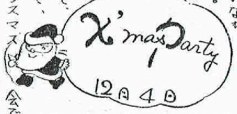
# はばたけ

No. 9

橋本陸軍省の自立を促す会  
 発行責任者 中山金央  
 発行所 自由堂 2555-1000  
 発行日 1938.12.30

我輩は  
 陸軍省が吹城の人々と共に  
 いさぎよと生活していきける  
 「おづくり」をすすめてい  
 ます。

小 ぎしこの夜 妙 差支ちゃんの声か  
 耳に残り、陽りの車の中で、まとまとら  
 と歌いました。歌いながら  
 ら、思ふたこと、歌いながら  
 手取りのチベットに  
 手取りのキャンドル  
 飾りつけも、人形劇  
 も、イテゴミルも  
 みんな毎作毎作みんな  
 が材料やかと持ちよせよ、  
 とつてもあたはかくて、  
 なごやがで登りつけます  
 した。でも後行員のままでの託付を参  
 加させてもらって、何か違うな……  
 と思ひました。今日みだいな日ごと、



いつも企画者側にいる陸軍省もつて、  
 運と、そのお父さんやお母さん達がいす  
 にすわっていいんじゃないか、公同  
 と。みんなの力をもちよつての、公同  
 のようなやり方を残しつつ、それぞれの  
 持ちよれる物（自由で動ける時間や意思  
 ・かくし芸・増洲・肉にひめたタレント  
 性・陸の下の方持ち……）がもつと増え  
 るといいなあと思ひました。  
 そのためには、外へへへへ  
 ルと情報集めのアンテナ  
 ナを高くすることが  
 必要なのかな、と  
 思ひました。  
 — K. I. 記 —



## (連載) 陸軍省の村へ行く

— 4 —

### ④ 自立について

私には、自立といふ言葉を聞い  
 て、ある意味とどこに自然に見ゆしま  
 います。

- ① 自立とは、
- ② 他人に委ねず自主の地位に立つこと。
- ③ 自ら帝王の位に立つこと。

と書いてありますが、これが、どうして  
 事情を拘束しているように見えます（つ  
 まり、一般的理解になつてゐる）こと  
 でしょうか、これでは、陸軍省の自立など  
 云々にはさへなりません。むしろ、ここに  
 は、陸軍省の生き方が、視界の外にあり

ます。  
 この為元  
 （自立↑依存↓隷属・支配）  
 は、日本の近代社会が生まれてくる中で  
 変着したのです。

明治の思想家たちは、封建制との闘い  
 を通じて、人々に、思想的にも封建制と  
 の闘いを訴へ、近代思想を普及しました  
 の際、「自主自由」や「自立した個  
 人」は、稀くような言葉だったのです。  
 しかし、一部の知識人には、手の届く  
 言葉であつても、多くの農民や労働者は  
 明日の水にも困る生活を営みながら、自  
 立の意味が、夢のようでした。

東洋から舞臺され、他人に屈服するこ  
 となく、自由一人の個人として生きる  
 — 自由民権家たちは、そうして人間像  
 に与えられて「自由」を「民主主義」を  
 主張したので、  
 その意義が大きかつたのですが、近代  
 社会の矛盾も大きくなつて、今日では

陸軍省を生きます。  
 私には、「依存なくして自立なし、  
 自立なくして依存なし」と思えます。  
 あるいは、陸軍といふ者は「依存しつ  
 つ自立する」姿だと考えます。

赤ちゃん（母（夫人）への依存なし  
 一日も生きられないように。あるいは  
 陸軍省が、やうと切く腹を注射を  
 する看護婦さん）に差しかつたり、養護の  
 先生がオムツを替るる時に腹を注射した  
 子の中に依存し、連帯し、新たな自  
 己への愛着可能性に向かつて、生きてい  
 ける姿を思ふのです。

そして、私には、陸軍省が「依存し  
 つつ自立する」場としての共同体、「好  
 むと理想しているのです。  
 そのために、多くの大人たちが愛着  
 の力、共同の力が必要です。

→ 翌朝は田沢先生が本年新年会の際、  
 講話をなさ、田沢先生が何回かにわたり、文筆地  
 にもなると、田沢先生が田沢先生に講話しました。



